

Middlemarch: Reading as George Eliot's "Sense and Sensibility"

惣谷 美智子

F. R. Leavis は、George Eliot を英文学の「偉大な伝統」上にある Jane Austen の継承者として位置づけ、エリオットがこの先輩作家から重要な影響を受けたことを示唆している (*The Great Tradition* 18-20)。本論に先立つ拙論「“An Extraordinary Fate”を読む—George Eliot, *Middlemarch* と Jane Austen, *Sense and Sensibility*」(以降、この拙論は“Fate”とのみ略記)では、そうしたオースティンとエリオットとの関係性を、『分別と多感』と『ミドルマーチ』における「異常な運命」を切口に比較考察しているが、本論はその続編にあたるものである。ここでは、エリオット自身が内包する *sense* と *sensibility*¹ という二面性と、この作家の創作技法との関連を探るが、本論においても引き続きオースティンとの比較において考察を進めていきたい。

1. エリオットの *sense* と *sensibility*

セシルは作者エリオット自身が抱えていた二面性、つまり、“intellectual”と“imaginative”な面(つまり、エリオット自身の *sense* と *sensibility* といってもよいようなもの)の分がちがたく結び合わされた緊密な関係性を以下のように指摘している。

... the truth is that there was a congenital disproportion in the original composition of George Eliot's talent. It had two sides, intellectual and imaginative. And they were inextricably connected. The intellect was the engine which started the machinery of the imagination working. But the engine was too powerful for the machine; it kept it at a strain at which it could not run smoothly and easily. So that it never produced a wholly satisfactory work of art. (327-28)

セシルによれば、エリオットの独特な才能には知的 (intellectual) な面と想像的 (imaginative) な面があったが、両者の関係性には、先天的に不均衡があり、知性が勝ちすぎて、想像力はたやすく動けないような緊張状態におかれていたという。その結果、エリオットには全面的に満足できる芸術作品は一つもなかったとセシルは裁断するのだが、「それでも、やはり」と、セシルは続けてエリオットの作品を高く評価している。

All the same, her achievement is a considerable one, more considerable than that of many more accomplished writers. *Middlemarch* . . . rouses far deeper emotions, sets the mind far more seriously astir. (328)

彼は、エリオットが知性と想像力という二面性ゆえに、『ミドルマーチ』では、彼女は自分よりも熟達した作家たち以上に、読者に対して、はるかに深い「感情」を呼び覚まし、また「精神」をはるかに真摯に揺さぶるのだと述べているのだが、確かに彼が指摘する *sense* と *sensibility* (の葛藤) は、示唆

的である。というのも、エリオットの作品が、そのように読者の「感情」と「精神」の深部にまで作用するのは、この作家自身の相互に入り組んだ *sense* と *sensibility* の二面性と大いに関連があるように思われるからである。そして特に『ミドルマーチ』では、そのような傾向が強くみられる。“Fate”では『ミドルマーチ』における主人公 Dorothea Brooke の「異常な運命」を形作ることになる「落差」について、オースティンの『分別と多感』の場合と比較考察しているが、本論ではそうした「落差」にまつわる個所を一部取り上げ、創作手法においてエリオットの緊密に絡み合った *sense* と *sensibility* のありようをみていこう。紙幅の関係もあり、ここではセシルが指摘するエリオットの *sense* と *sensibility* の「先天的な不均衡」については論を改めて考察することにして、まずはエリオットの *sense* と *sensibility* の帯びる緊張状態が、この作家の創作とどのように関係してくるのか、オースティンとの比較においても検証していきたい。

2. 知的技巧としての「感情」

エリオットの作品は概してその根底に、読者側の「共感」(*sympathy*) への作家の目配りのようなものが感じられるが、そうした共感へのいわば誘導が、作者の感情の伝達というよりは、むしろ作家的技巧、つまり作者の創作上の知的操作である点は興味深い。エリオットはそうした手法においてもオースティンと酷似している。たとえば、『分別と多感』においてオースティンが試みた主人公 Marianne Dashwood の「異常な運命」の創造が、批評家 Marvin Mudrick の「共感」ではなく、逆に痛烈な「反発」を呼び起こした例を以下に引用してみよう。

We may be assured that everyone turns out to be prudently happy, with even a share of domestic satisfaction left for the villain [Willoughby]. But we are not to be reconciled. Marianne, the life and center of the novel [*Sense and Sensibility*], has been betrayed; and not by Willoughby. (93)

端的にいつてしまえば、マドリックは、メアリアンを裏切ったのは彼女の恋人ではなく、むしろ作者のオースティン自身であることをここで糾弾しており、彼は作者オースティン自身に対する感情的なまでの反撃を試みている。しかし、こうした反発は、逆にいえば、オースティンの作家としての勝利をこそ物語っているだろう。というのも、共感ではなく反発であったにしろ、オースティンの手法はそれほどまでにこの批評家の「感情」を揺さぶったということであり、それはマドリック（つまりは、読者）側のそうした感情にまでいきつくようにした作家側の「意図」（“Fate” 21）、知的操作の成功をまさしく物語っているからである。

そしてこれに類似したことが、エリオットの場合にも起こる。情熱過多という欠点にもかかわらず、ドロシアもまた『分別と多感』のメアリアンがそうであったように魅力的に息づいているのだが、主人公に＜生命＞を吹き込むのが、作者のきわめて知的な操作である点でもエリオットとオースティンは重なってくる。

エリオットの場合、作者は自らが狙う「共感」へのいわば起爆剤を、いかに読者の内奥の深部にまで到達させるのだろうか。Roland Barthes は二項対立を“the very spectacle of meaning” (Barthes 138) として捉えているが、以下において主に二項対立、対比という手法を通してエリオットの文学的技巧をみていきたい。

3. 主人公の魅力

ドロシアの「異常な運命」が、読者の感情を揺さぶることになる大きな要因の一つは、始まりと終わりの間に生じさせられた落差の効果によるものであることは考察してきたが（“Fate”）、そうした効果を実感するためには、作者はまず主人公を魅力的に描出して、彼女たちに対する読者の共感、思い入れ、といった「同化」を確保しておく必要がある。というのも、これは『ミドルマーチ』と『分別と多感』の主人公たちに共通していえることだが、彼女たちに本来的に備わっているとされる魅力、輝きが鮮明であればあるほどその消滅は、落差の意外性となって深く読者に印象づけられるものとなるからである。

両主人公を特徴づけているのは、若さの輝きであるが、それは必然的に人生経験に乏しい若者の思慮分別の欠如であり、また過剰なまでの情熱をも含まずにはいられないものである。『分別と多感』は風習喜劇（comedy of manners）の常として軽薄、因習、愚行を描きながらもオースティンの場合、決してシニカルにならず、作家の的確かつ精妙な性格描写に裏づけられた人物たちが織りなす人間模様は、作品全体に仕掛けられたオースティン独特のユーモアに支えられ、最終的には結婚プロット（marriage plot）にふさわしい結婚の＜祝祭＞に彩られる。他方、『ミドルマーチ』は、センシルなどが指摘するように、作品そのものがエリオットの厳格な道徳的価値基準、精神的態度に裏打ちされた一つの重厚な“criticism of life”（291）の態をなしている（“Fate” 12）。このように両作品のジャンルは異なるのだが、ドロシアもまた同様に作家の誇張によって、確かにいささか滑稽の観を免れ得ない存在になっていることも事実である。さらに主人公たちが逃れられないそうした弱点が、同時にむしろ彼女たちの強みともなり、ときには欠点をかすませてしまうほど強烈な魅力となる点でも両者は共通するだろう。読者は、主人公たちの欠点にもかかわらず、ではなく、彼女たちの欠点ゆえに彼女たちの若さのもつ純粋性、熱烈さ、そして熱狂というものが発散する躍動感、生命感のようなものに心動かされずにはいられないのである。その意味で主人公たちは、人物創造の観点からすれば、E. M. Forster のいう、“round”（65）な存在へと育っていき、読者は主人公が「欠点にもかかわらず」ではなく、むしろそうした「欠点ゆえに」魅力的であるという印象を抱く。それは、今述べたような「若さ」というものが無条件に読者の心に湧き上がらせる、一種憧憬めいた共感からだろうが、しかし、文学的技巧からみれば、そうした読者側のいわば *sensibility* に作用を及ぼすのが、作者側の *sensibility* であるというよりは、むしろ *sense* であることは注目すべきであろう。以下にそうした作用を可能にしているエリオットの技巧の一つである「対比」の手法をみていこう。

4. 「対比」という手法

オースティンの場合 *sense* と *sensibility* という、二項対立、対比による書名が明示するように、一方では、*sense* の体現化とされる Elinor Dashwood を魅力的にみせながら、また他方では、*sensibility* のメアリアンの魅力も浮き彫りにしている。しかし、こうした姉妹の一見、明瞭に対比している *sense* と *sensibility* も、たとえばバルトのいうように、登場人物を合成する一つの「意味素」として考えればどうであろうか。

When identical semes traverse the same proper name several times and appear to settle upon it, a character is created. Thus, the character is a product of combinations: the combination is relatively stable (denoted by the recurrence of the semes) and more or less complex (involving more or less congruent, more or less contradictory figures); this complexity determines the character's "personality". (SZ 67)

もし、登場人物というものが、バルトが指摘するように「合成の産物」であり、その複雑性こそが、登場人物の「個性」を決定するとすれば、(登場人物の意味素であると考えられる) *sense* と *sensibility* もまた、「対比」という手法を潜らせた後では、「収斂されるものであるよりも、むしろ動的に拡散していくもの」であり、「アレゴリカルな作品として限定した場合にみえていた、題名の対立概念の単純明快さは曖昧模糊としたもの」(惣谷『虚構』76)になるだろう。

オースティンと同様に、エリオットもまたドロシアと *Celia Brooke* という、*Sense and Sensibility* におけるエリナとメアリアンの *counter parts* を思わせる対照的な姉妹を配置しているが、この姉妹の対比に関しても読者はその対比の見極めに、注意深い洞察力、いわば知的視力の調整が必要となろう。オースティンの場合同様、エリオットの対比の扱いにもまた作家の知的操作という、意図的なものが感じられるからである。

まずエリオットの場合、そうした人物間にみられる *sense* と *sensibility* の対比はドロシア自身の内部にも仕掛けられることになる。しかもその対比は静的なものとして定着するものではない。それはエリオットの作者の声によって語られると、ある種の意味の揺らぎのようなものが生じてくる。以下にその具体的な一節を例にとり、ドロシアをめぐる“*custom*”と“*passion*”の関係性のいわば揺らぎを、たとえばバルトの言葉を借りれば、「スローモーションの読み」(“... *this reading will be filmed in slow motion.*”) (*Challenge* 264)においてみてみよう。以下はドロシアという人物が最初に紹介される場面である。

... she was enamoured of intensity and greatness, and rash in embracing whatever seemed to her to have those aspects; likely to seek martyrdom, to make retractations, and then to incur martyrdom after all in a quarter where she had not sought it. (8)

ドロシアの気紛れにも似た「殉教者」(“*martyrdom*”)への渴望、すなわち「強烈なもの、偉大なものに心酔し、それらしきものならなにであれ、抱きかかえようとする」情熱は、確かに献身という使命感に燃えたドロシアの道徳的価値観に深く根差したものである。それは当然、そのまま喜劇におけるメアリアンの情熱、つまり個人のロマンス的嗜好への *sensibility* の耽溺と同一視するわけにはいかないが、ドロシアの殉教者への渴望は、本人はしごく大真面目であるとはいえ、周囲の者、そして読者にとっては、ともすれば滑稽にも感じられるものであり、その極端さゆえに読者はドロシアに対し、おのずから喜劇の登場人物に対するような批判的距離を取るようになる。こうした個所のみ取り上げれば、この主人公がオースティンの創造世界の住人(登場人物)であっても少しも違和感はない。ドロシアが殉教者を目指すそもその発端、その動機自体は一見 *sense* にみえながらも、むしろ *sensibility* の存在をうかがわせる。ドロシアを描くエリオットのペンは透徹しており、醒めている。ドロシアの崇高な意図、情熱はどこまで *sense* として留まり、またどこから *sensibility* に変貌するのだろうか。ドロシアの崇高ともいべき理想は、その過剰によって読者の目には、むしろ主人公の *sensibility* のほうへと必然的に地すべりを起こすことになる。ここでは、エリオットの作家的知性はドロシアの *sense* と *sensibility* の危うさを巧みに透かし出しているのである。

だが、作家の語りはこれで終わりになったわけではない。手法の点では、語りの後続部分のほうがむしろさらに巧妙になってくる。作者の知性は、語りの前半ではドロシアの“*passion*”を透徹するような

冷静な操作を行いながらも、逆に後続文では確実にその“passion”を擁護する側にまわっているようにもみえるからである。

Certainly such elements in the character of marriageable girl tended to interfere with her lot, and hinder it from being decided according to custom, by good looks, vanity, and merely canine affection. (8)

上記の表現には、かすかな価値の転覆ともいえるものが見出せる。オースティンの風習喜劇にも通じるような“intellectual”な側面が表出する。なるほど作者が語るように、「結婚適齢期の娘の性格にそうした[殉教者への渴望のような]要素」があるために、主人公の「運命」が、“custom”による決定を免れることもあろう。だが、後続文で列挙されることになる“custom”の内訳が、“good looks, vanity, and merely canine affection”といったものでしかないとなれば、ここで作者に披歴されるのは、“custom”の卑小さでしかない。結局、読者が確認することになるのは、卑俗な“custom”から逸脱し、あるいはむしろそれを超越しようとする、ドロシアのスケールの大きさのほうであるのだ。

このようにエリオットは、ドロシアに対する読者の共感を獲得するのだが、それは静的なものではなく、むしろ捩れを含んだ作者のレトリックの揺れのようなものに依っている。ここで作用しているのは、エリオットの感情というよりは、むしろ先行文を「転倒」させるという、作家のきわめて知的な仕掛けであるだろう。言葉をかえれば、エリオットは、いわば作家としての sense によって読者側の sensibility を息づかせているのである。

こうした作者の sense が読者の sensibility を揺さぶるような手法は、ドロシアとシーリアとの対比においても見出せる。そしてそこにもなにか意図的な二重性が読み取れる。シーリアは、あどけない外見に似合わぬ抜け目なさや世知を兼ね備えており、ミドルマーチの住民の目には、ドロシアとは対照的に“common-sense”を代弁するような人物として描かれている。“Dorothea is not always consistent.” (14)——ドロシアに内在する矛盾は、すでにシーリアの“consistency” (13) という判断基準によって見透かされているのであり、シーリアの sense がドロシアの sensibility、あるいは sense と sensibility との、(セシルがエリオット自身に当て嵌めた言葉をここでも用いれば) 危うい「不均衡」を見抜いている。だが、シーリアの“common-sense”も、その質を少し検討してみれば、それは実に卑小、卑俗なものでしかなく、結局、ドロシアとの対比は、読者には逆に、ドロシアという登場人物のスケールの大きさを印象づけ、この主人公のもつダイナミズムのようなものをさらに力強く、根深く読者に感じさせることになる。

たとえば、ヘンリー・ジェームズは、“Celia Brooke is as pretty a fool as any of Miss Austen’s.” (358) とシーリアを一言のもとに切り捨てている。彼の台詞の背景には当然、世紀末的な時代思潮であった“decadence”も大いに関係しているだろうが、しかし、彼の意見は正鵠を射ている。シーリアの“common-sense”もまた盤石ではない。さらに正確に言えば、盤石のように描かれていない。

ジェームズが裁断するように、シーリアがはたしてオースティンの描く喜劇的人物にまで引き下げられる(あるいは、引き上げられる)か否かは別にして、人物のスケールという点では、ドロシアは、はるかにシーリアを凌いでいるだろう。「シーリア」は、ドロシア(の“greatness”)を前景化するために一方的にいわば消費される。前述したように、作家自身の語りに呈示された“custom”は、前文とは対比的な後続文によって転倒させられたのだが、ここではドロシアと対照的な人物であるシーリアを(ドロシアからわずかに離れたところで)転倒させてみせる、という構図によってエリオットの技巧は

読者の共感を確実にする。ドロシアは、ここでもまたシーリアが誇る“common-sense”からの逸脱、超越によって読者に対し、その存在をさらに大きくする。端的にいつてしまえば、ドロシアのダイナミズムを産出するのは、まさしく作者の技巧のダイナミズムによってであるのだ。

5. 「共謀」する読者

ドロシアの魅力を描き出す場合、創作者としてのエリオットは、直接性を巧みに避けている。さらに厳密に言えば、エリオットは直接的表現であるよりは、対比によって読者をむしろ刺激するという手法によって、自分が描こうとする主人公の魅力を、まず読者と協働して創り上げることを意図しているように思われる。共感への感受性といったものの背後には、当然エリオット自身の豊かな *sensibility* の存在はあるのだが、そうした *sensibility* の領域を表現する場合に、エリオットはむしろ冷徹ともいべき *sense* の領域で創作しているのである。

結局、ここでは読者もある意味、エリオットと「読み」の共謀者ということになる。というのも、エリオットのこの手法によって読者が共感し、「感情」に浸るのは、仕掛け人であるエリオットの直接的な「感情」ではなく、「知的」な操作を、読者もまた知的に解読した結果に他ならないからである。読者のこうした共謀性（という、一種の潜在能力）は、おそらくエリオットが自分の読者に求めていた前提条件であり、こうした「共謀」は、創作の時点ですでにこの作家には織り込みずみのものでもあっただろう。読者側のそうした共謀性は、議論を突き詰めれば、読者自身が「読む」ことから、むしろ「書き」はじめる行為にもつながっていく。この作家にとって、読者への共感への喚起は、描くことであるよりは、共感を読者とともに分かち合う行為、否、さらに正確に言えば、むしろ読者とともに創り上げる行為となるのである。²

前述したように、ジェイムズはシーリアを、オースティンが描く“fool”と同一視したが、ドロシアもまた、ときとしてオースティンの登場人物を思わせる。それは当然、“fool”としてではなく、本質的な意味においてである。ドロシアの主人公としての造形の広がりや深さには、前述してきたメアリアンのみならず、オースティンの後期作品における主人公たちにさえ連なるものがあると思われる。³ そうしたことが可能であるのは、ドロシアが、エリオット自身が内包している *sense* と *sensibility* との分ちがたい結びつきという、強力な味方をつけて創造された人物であることとも大いに関係しているだろう。

リーヴィスがエリオットに対するオースティンの深遠な影響を指摘しながら、具体的な定義には及ばなかったのは、「偉大な独創的作家間の影響の定義は困難極まりない」(Leavis 18-19) というのが、理由であったが、本論でみてきたように、対比という手法を切口に、エリオットの *sense* と *sensibility* を吟味していけば、リーヴィスが示唆のみに留めていたオースティンとの関係性もいくぶん説得性もってくるように思われる。エリオットが内包する分ちがたく結び合った *sense* と *sensibility* は、セシルが指摘するように、たとえそれが「不均衡」なものであれ、『ミドルマーチ』での手法としては見事に結実している。その「不均衡」を指摘したセシルでさえ、「結局のところ」と、以下のように結論づけるのだ。彼はエリオットのことを、最高の芸術家ではないにせよ、小型でもなく、彼女は「偉大な作家 (“a great writer”）」(328)であったとするのである。そして読者は、作者に対してのみならず、ドロシア、つまり作者と同様に、最高でないにせよ、小型でもない、「偉大な」主人公に共感することになる (“Fate” 23) のだが、まさに、それはエリオット自身が内包する *sense* と *sensibility* が混然一体化した文学的手法のなせる技に依るところ大であろう。

Notes

1. “sense”、“sensitivity”の訳語に関しては、一般に「知性」、「感性」等考えられようが、エリオット自身が内包する“sense”、“sensitivity”は、オースティンの『分別と多感』における“sense”、“sensitivity”同様、その意味合いは微妙で、本論でも述べるように、おそらく「収斂されるものであるよりも、むしろ動的に拡散していくもの」とも考えられるので、本論では一つの訳語に定着させるより、流動的な解釈が可能ないように、概して英語をそのまま採用している。なおこの二語に関しては、読みにおける煩雑さを避けるために引用符を省略している。

2. 受容者側の「読み」から「書く」行為へと移行するプロセスには興味深い側面が見出せるが、この問題に関しては、“Fate”の結論で少し触れ、また、たとえば Anne Brontë によって描かれた絵の一枚をテーマに、すでに以下の英国ロマン派学会主催の国際学会シンポジウムでも発表しているので本論では詳述しない。

“Anne Brontë and Her Friedrich-like Romantic Drawing, ‘Woman gazing at a sunrise over a seascape’” presented at the 14th International conference for the British Association for Romantic Studies. Cardiff University, 19 July 2015.

3. 紙幅の関係上、このテーマについての議論展開は、論を改めて行う。

Works Cited

- Austen, Jane. *The Works of Jane Austen*. Vol.1. *Sense and Sensibility*. 1811. Ed. R. W. Chapman. London: Oxford UP, 1974.
- Barthes, Roland. *S/Z*. 1970. Trans. Richard Howard. New York: Hill and Wang, 1974.
- . *Roland Barthes by Roland Barthes*. 1975. Trans. Richard Howard. New York: Hill and Wang, 1977.
- . *The Semiotic Challenge*. 1985. Trans. Richard Howard. New York: Hill and Wang, 1988.
- Cecil, David. *Early Victorian Novelists*. 1934. London: Constable, 1980.
- Eliot, George. *Middlemarch*. 1871-1872. New York: Oxford UP, 2008.
- Forster, E. M. *Aspects of the Novel*. 1927. London: Edward Arnold, 1958.
- James, Henry. “Unsigned Review”, *Galaxy*, March 1873. *George Eliot: Critical Heritage*. Ed. David Carroll. London: Routledge and Kegan Paul, 1971.
- Leavis, F. R. *The Great Tradition*. 1948. Middlesex: Penguin, 1974.
- 惣谷美智子 『虚構を織る——イギリス女性文学 ラドクリフ、オースティン、C.ブロンテ』英宝社, 2002.
- . 「“An Extraordinary Fate” を読む——George Eliot, *Middlemarch* と Jane Austen, *Sense and Sensibility*」『ジョージ・エリオット研究』第二十二号、日本ジョージ・エリオット協会, 2020.11-25.
- Soya, Michiko. “Anne Brontë and Her Friedrich-like Romantic Drawing, ‘Woman gazing at a sunrise over a seascape’” presented at the 14th International conference for the British Association for Romantic Studies. Cardiff University, 19 July 2015.